様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　6　日現在

機関番号：12601
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009 年度～2011 年度
課題番号：21730403
研究課題名（和文）現代都市再開発における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究

研究課題名（英文）Research on Producing, Circulating and Consuming the Celebrity of Architects in Contemporary Urban Redevelopment

研究代表者
南後　由和（NANGO YOSHIKAZU）
東京大学・大学院情報学環・助教
研究者番号：10529712

研究成果の概要（和文）：国内外の現代都市再開発において、建築家の有名性が社会的に生産、流通、消費される仕組みを、建築専門誌と一般紙誌の比較、クライアントの系譜の分析、海外の都市再開発の現場のフィールドワークにより明らかにした。また、他ジャンルの有名人のなかにおける建築家の有名性の特異性を論証するために、「文化人」というカテゴリーに着目し、建築界、文学界など、「界」ごとに異なる有名性の存立様態を比較した。

研究成果の概要（英文）：My research has elucidated how the celebrity of architects has been produced, circulated and consumed in domestic and foreign contemporary urban development by comparing specialized architectural magazines and general interest magazines, analyzing the genealogy of clients and doing fieldwork on the site of foreign urban redevelopment. My research has also focused on the category of ‘cultural figures’ and compared the different modes of the existence of celebrity by world, such as the architectural world and the literary world in order to relativise and demonstrate the uniqueness of the celebrity of an architect from other genres’ famous people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：社会学、建築家、有名性、文化人、クライアント、都市再開発、マスメディア、展覧会

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、技術・官僚主義による均質的な空間計画へ疑義を唱えた 1960 年代のアンリ・ルフェーヴルやシチュアシオニストの都市・空間論の思想的研究を土台に、建築家の作家主義的態度が引き起こす問題を考察してきた。しかし、それらの都市・空間論は、建築家の社会的存立様態やハビトゥスを軽視して、建築家を本質的な計画主体として捉えて批判をする点に問題を抱えていた。そこで「戦後日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究」（2006

～2007 年度日本学術振興会特別研究員研究課題）では、建築家を取りまく制度、マスメディアからなる社会的諸関係を析出する、ハワード・S・ベッカーの「芸術界」やピエール・ブルデューの「場」など芸術・文化社会学の視座に着目し、建築家の規範や評価基準を内包した「建築界」の枠組みを理論的に整理した。また、建築家の有名性は、建築界やマスメディアにおいてのみ生産・流通するのではなく、クライアント、ユーザーなどとの利害関係を孕みながら、都市空間に物理的かつ重層的に空間化される。「空間化された表象」としての有名性は、社会的諸関係が空間化される側面を指摘したルフェーヴルの都市・空間論の射程と共鳴する。よって、都市・空間論と芸術・文化社会学の双方を交差させた独自の理論的枠組みを構築し、1970 年の大阪万博までを時代的な区切りとして、戦後日本における建築家の有名性をめぐるダイナミズムを分析してきた。

本研究では、以上の研究蓄積を継承し、1970～90 年代まで分析対象を拡張することにより、20 世紀後半における建築ジャーナリズムを通した建築家の有名性の生産・流通・消費、および建築家-クライアント-コンペティションの結びつきに関する研究の体系化を試みようと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、都市・空間論と芸術・文化社会学とを交差させた理論的枠組みをもとに、国内外の現代都市再開発において、建築家の有名性が社会的に生産、流通、消費される仕組みを、主にクライアント（施主、発注者）、建築ジャーナリズムの二つを分析軸として明らかにすることにある。研究対象とする時代区分は、国内の場合は、大阪万博以後の 1970 年代における文化行政および民活の都市再開発の導入から、バブル崩壊を経た 90 年代までとした。

３．研究の方法

(1) 大阪万博の前後で、メディア・イベントの組み込みによる都市空間の編成により、日本の建築家の社会的位置がどのように変容していったのかを考察する。また、他ジャンルの芸術家の有名性の存立様態との比較分析をするため、「文化人」という形象に関するジャンル横断的な考察を、編著本の編集を通して進める。

(2) クライアントに関しては、磯崎新の建築作品のクライアントを、磯崎新アトリエのスタッフの協力を仰ぎながら、年代別、属性別、地域別に網羅的に整理する。一方では、磯崎氏本人に、クライアント、文化人ネットワークなどに関するインタビューを実施する。

(3) 現代日本の建築家を対象として、建築専門誌と一般紙誌における表象の差異を比較検討し、建築家の社会的地位やパブリック・イメージの変遷を明らかにする。

(4) 都市間競争を背景にしたコンペティションや、場所的な制約を越えた空間組織化に加担している有名建築家とクライアントの結びつきを、理論的かつ実証的に解明する。また、「計画」のメカニズムから「市場」のメカニズムへの移行における、建築家の有名性へと向けられるまなざしの変容および、そこに孕まれる利害関係を論証する。

４．研究成果

(1) 建築家の有名性の生産・流通・消費のメカニズムを相対化する研究の一環として、『文化人とは何か？』（東京書籍）を共編著で刊行した。日本において「文化人」がどのように語られ、いかにその曖昧な形象が成立してきたのかを、新聞・雑誌記事の言説分析を中心として明らかにした巻頭論文「〈文化人〉の系譜――界とマスメディアの交わり」の執筆と、建築家の磯崎新氏へのクライアントの系譜に関するインタビューを担当した。建築家のクライアントに関する研究はこれまで皆無に近く、その体系化に向けた布石となる成果をあげることができた。

(2) 建築家・黒川紀章のマスメディアにおける表象を、建築専門誌と新聞・一般誌の比較考察、テレビ番組のアーカイブ調査などによって分析した。そのことにより、建築専門誌のみならず、新聞、一般誌、テレビなどのマスメディアおよび他ジャンルとの関係において、建築家・黒川紀章のイメージがどのように生産、流通、消費されていったのかを明らかにした。この研究内容の一部は、企画メンバーとして参加した「メタボリズムの未来都市」展（森美術館）のカタログに寄稿した。

(3) 建築家、写真家、美術家、音楽家などとの対談を通じて、建築と周辺領域の関係を多角的に考察することにより、建築が現代社会において生産、流通、消費されるプロセスの固有性を追究した。これらの成果は、『アサヒカメラ』、『新建築』、『情報学研究 調査研究編』などの誌面で発表した。

(4) 現代における都市とアートの関係を、世界各地の具体的事例を通して紹介する「スペクタクル展――共振する都市とアート」（象の鼻テラス）の企画委員を担当した。また、同じく展覧会「デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来」（ミサワホーム株式会社）の企画監修を行った。建築家、マスメディア、不動産、住まい手という多角的な観点からの分析展示を行い、建築と社会を架橋する新たな評価軸を導入することができた。社会学者が企画監修をした建築展は前例が少ないとい

う点でも独創的な成果となった。展覧会というメディアの特性を把握することで、論文や口頭発表とは異なる、社会学のアウトプットや伝達可能性を切り開いていくうえでの大きな手がかりを得た。
(5) ロッテルダムでは、オランダ建築博物館（NAi）での建築アーカイブとパブリック・プログラムに関する調査、ベルリンでは、ポツダム広場周辺を中心に1990年代以降の現代都市再開発と有名建築家との結びつきに関する現地調査を行った。過去に実施したパリ、バルセロナ、ビルバオなどの現地調査と比較検討することによって、グローバル化する都市の再開発と建築家の有名性をめぐる文化経済に関する見取図を得ることができた。
(6) 1970年代以降の現代都市再開発と建築の文化産業に関する研究を行うため、ロンドンへ海外出張し、RIBA(英国王立建築家協会)、Architectural Foundation、The Building Center、王立芸術院、ヴィクトリア＆アルバート・ミュージアムなどで、建築のアーカイブやアウトリーチに関する資料収集やヒアリングを行った。また、ドッグランズ地区、ロンドン・オリンピック 2012 の敷地を中心に有名建築家の設計による都市再開発現場の現状をフィールドワークした。これらの調査を通じて、今後、建築の文化政策・文化産業に関する比較研究を体系的に進めていくうえでの土台作りをすることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）
① 大野和士、阿部純、犬塚悠、南後由和、難波阿丹、橋本尚樹、松山秀明、柳井良文、渡邉宏樹、指揮者・大野和士氏インタビュー――内的必然性から響きあう音楽情報学研究　調査研究編、No.28、2012、pp203-242
② 南後由和、ホンマタカシ、「今日の写真 2011 ⑪」、アサヒカメラ、2011 年 11 月号、pp181-185、2011
③ 南後由和、いま必要とされる建築家像をめぐって、OPENERS Website「いま、世界が注目するニッポンの若手建築家たち」、2011
④ 鈴木謙介、南後由和、濱野智史、ソーシャルネットワークは都市を開くのか、閉じるのか、city&life、No.100、2011、pp12-19
⑤ 塚本由晴、貝島桃代、乾久美子、南後由和、パブリックスペースをつくる――共同・共有に向けた建築的アプローチ、新建築、2011 年 7 月号、2011、pp30-35
⑥ 南後由和、ホンマタカシ、「今日の写真 2011 ⑥」、アサヒカメラ、2011 年 6 月号、pp165-169、2011
⑦ 南後由和、コンスタントのニューバビロン×建築界(3)、SITE ZERO/ ZERO SITE、No.3、2010、pp308-323
⑧ 北田暁大、南後由和、速水健朗、東浩紀、ショッピングモールから考える――公共、都市、グローバリズム、思想地図β、Vol.1、2011、pp54-77
⑨ 南後由和、都市・建築のインテリジェンス、αシノドス、Vol.45、2010
⑩ 南後由和、建築の「際」を見極めて――建築の固有性と可能性を追求、No.1163、2010、p16
⑪ 南後由和、1990 年代の建築家によるフィールドワーク――レム・コールハース、アトリエ・ワンを事例として、建築雑誌、Vol.124 No.1593、2009、pp14-15

〔学会発表〕（計 10 件）
① 南後由和、都市について考える、オルナタティブ・カフェ、2012 年 3 月 6 日、アートエリア B1
② 南後由和、生きられた建築・都市・社会、東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科卒業／修了研究・制作展特別講演会、2012 年 2 月 16 日、東北芸術工科大学
③ 南後由和、塚本由晴、大和田芳弘、正木覚、つながりのデザインを考える、ジャパンガーデンデザイナーズ協会 10 周年記念フォーラム、2011 年 8 月 20 日、新宿 NS ビル
④ 福住廉、南後由和、戦後美術の周辺のその社会背景、中原佑介を読む――美術批評の地平、ヒルサイドライブラリー
⑤ 李明喜、南後由和、都市とメディアの間――読み取りと書き換えのフィールド、メディアがつくる違和感、2011 年 1 月 15 日、明治大学
⑥ 石上純也、南後由和、公開対談、「石上純也――建築のあたらしい大きさ」展、2010 年 12 月 26 日、豊田市美術館
⑦ 南後由和、建築と社会学の際、UTalk、2010 年 5 月 15 日、東京大学
⑧ 南後由和、集まって住むことの広がり、デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来展（ミサワホーム株式会社 A プロジェクト）、2010 年 3 月 16 日、新宿 NS ビル
⑨ 南後由和、デザイナーズ集合住宅の可能性、デザイナーズ集合住宅の過去・現在・未来展（ミサワホーム株式会社 A プロジェクト）、2010 年 3 月 13 日、新宿 NS ビル
⑩ 南後由和、畠山直哉、スペクタクル・トーク、スペクタクル展――共振する都市とアート、2009 年 10 月 13 日、象の鼻テラス

〔図書〕（計 8 件）
① 南後由和、新建築社、黒川紀章――マスメディア時代の建築家像、森美術館編『メタ

ボリズムの未来都市』、pp260-266; Yoshikazu NANGO, Shinkenchiku-sha, “Kisho Kurokawa: A Portrait of an Architect in the Age of Mass Media”, Mori Art Museum ed., *Metabolism, The City of the Future*, 2011, pp261-267

② 南後由和、ちくま学芸文庫、「文庫解説」、アンリ・ルフェーヴル『都市への権利』、2011、pp226-247

③ 南後由和、小川希、東京文化発信プロジェクト、「蠢きとしてのムーブメント――TERATOTERA と文化発信地・東京の可能性をめぐって」小川希『アートプロジェクトの0123』、2011、pp12-32

④ 南後由和、加島卓編、東京書籍、『文化人とは何か？』、2010、358

⑤ 南後由和、東京国立近代美術館、「建築物とインスタレーションの離接運動」、『建築はどこにあるの？――7 つのインスタレーション』、2010、pp104-108; Yoshikazu NANGO, The National Museum of Modern Art, Tokyo, “The Disjunction between the Architectural Structure and the Installation”, *Where is Architecture? Seven Installations by Japanese Architects*, pp110-115, 2010

⑥ 南後由和、せりか書房、「デザイナーズ・マンションの因数分解」、遠藤知巳編『フラット・カルチャー』、2010、pp261-271

⑦ 大山エンリコイサム、南後由和、millegraph、『アーキテクチャとクラウド――情報による空間の変容』、2010、pp80-100

⑧ Yoshikazu NANGO, Rizzoli, “Atelier Bow-Wow’s Approach to Urban and Architectural Research”, *Atelier Bow-Wow: Behaviorology*, 2010, pp321-341

６．研究組織

(1)研究代表者

南後　由和（NANGO YOSHIKAZU）

東京大学・大学院情報学環・助教

研究者番号：10529712

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：